

〔課題演習抄録〕

根拠にもとづいて考える社会科学学習指導法の研究 - 「つくる・比べる・決める」の過程を通して -

伊 賀 董
Sumire IGA

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：根拠にもとづく考え，社会科学学習指導法，小集団交流

1 研究の目的

情報化や国際化の進展により，今日の社会には複雑に絡み合った様々な問題が存在している。このような問題の解決・克服策を考え，より望ましい社会をつくりあげることが，これからの社会の担い手である生徒には期待されており，社会科の果たす役割も大きい。

横尾（2016）は，「中学校社会科の授業において具体的な解決策や対策を主張する際には，根拠を示しながら主張することが重要」と述べており，小栗（2006）は，「社会科における小集団交流は，他者の発言を聞き，他者の発言内容について考え，それらを活用して自分自身の考えを吟味する場」と述べている。

そこで，授業の各時間に設定する学習課題に対して，①資料から読み取ったことを根拠とし自己の考えを「つくる」過程，②小集団交流を通して他者と考えを「比べる」過程，③他者の考えを踏まえ自己の考えを修正・強化し学習課題に対する自分なりの考えを最終的に「決める」過程，という3つの過程を取り入れた学習指導に取り組むことで，根拠にもとづいて考える社会科学学習指導のあり方を解明する。

2 研究の計画

平成 29 年 4 月～5 月	生徒の実態把握・実践授業Ⅰの教材研究
平成 29 年 6 月	実践授業Ⅰ
平成 29 年 7 月～8 月	実践授業Ⅰの分析
平成 29 年 9 月～10 月	実践授業Ⅱの教材研究
平成 29 年 11 月	実践授業Ⅱ
平成 29 年 12 月	実践授業Ⅱの分析

3 研究の内容

(1)実践授業Ⅰ

①授業の概要

単元名	「中国・四国地方」（全 6 時間）
本時	過疎化が進む地域の努力（5/6 時間）
実施日	平成 29 年 6 月 28 日
学習者	福岡県内公立中学校第 2 学年 25 名
主眼	中国・四国地方で進む過疎の問題を克服しようと取り組んでいる人々の営みを調べる活動を通して，人口と都市・村落を中核とした中国・四国地方の地域的特色を考察し，表現することができる。

②各過程の実際

「つくる」過程では，前時までの学習をもとに「つまものの生産が上勝町を活性化することができた理由を考えよう」を学習課題に設定し，追求の視点として「自分が住む地域・宗像と比較しながら地域活性化のために重要なことは何かを考える」ことを示した。その上で，配布した資料をもとに「つまもの」の生産について調べる活動を行わせ，この活動で得た情報を根拠に，地域活性化のために重要な取り組みを自分なりに考えさせた。この過程では，資料をもとに自己の考えを学習シートに記述していた生徒が多く見られ，根拠にもとづいた考えができていた。

「比べる」過程では，生徒は 4 人で構成するグループで，自分の考えを交流する活動を行わせ，提示した 5 つの取り組みの中から最も重要と思われる取り組みを選択させた。この過程では，小集団交流が単に考えを発表し合う場になってしまい，他者の考えの根拠に着目したり，自他の考えの違いを検討するなどの深まりが見られなかった。

「決める」過程では，「他者の考えを踏まえ，地域活性化のために必要な取り組みについて自己の考えを修正・強化し，過疎問題を解決・克服するための最終的な考えを整理する」ことをねらいとした。しかし，「比べる」過程の学びが十分深まらなかったこともあり，過疎問題の解決に向けた考察・表現ができた生徒は 1/5 程度であった。

③考察

表 1 授業の主眼の達成状況（学習シートの分析結果 N=25）

評価基準	人数
A 将来、過疎問題を解決・克服しようと考察し、表現することができている	5 名
B 中国・四国地方の地域的特色を資料にもとに考察し、根拠を示しながら表現することができている	13 名
C 授業の感想を表現することができている	7 名

本時の主眼を達成できた生徒は 18 名にとどまった（表 1）。3つの過程のうち特に「比べる」過程での小集団交流が、「決める」過程で自分なりの考えを決めることにどのように影響したかを分析する必要があったが、この実践ではその見取りが十分ではなかった。生徒の考えの変容の状況を丹念に捉えていくことが今後の実践の課題である。

(2)実践授業Ⅱ

①授業の概要

単元名	「江戸幕府の成立」（全 9 時間）
本時	260 年以上続いた江戸幕府（1/9 時間）
実施日	平成 29 年 11 月 29 日
学習者	福岡県内公立中学校第 2 学年 25 名
主眼	諸資料にもとづいて自己の考えをつくり、小集団で交流する活動を通して、江戸幕府が 260 年以上続いた理由を自分なりに考えることができる。

②各過程の実際

戦国・安土桃山・江戸の各時代について、その長さを比較させ、「なぜ江戸時代は 260 年以上続いたのか」と発問した。生徒からは疑問に思ったことなどのつぶやきが聞かれ、それを取り上げて学習課題として設定することで、課題意識を切実感のあるものにした。

「つくる」過程では、江戸幕府が行った政治・外交・経済の政策の中で、江戸幕府が 260 年以上続いたことにどの政策が大きく影響したか予想させ、その理由を記述させた。その際、資料から読み取ったことを根拠とし、理由を記述するようにした。資料の読み取りが困難な生徒に対しては、ヒントカードを用いて資料を読み取る際の視点を与えた。

「比べる」過程では、個人が立てた予想を、4 人の小集団で構成するグループにおいて交流する活動を行わせ、初めにつくった考えが小集団交流を通してどう変化したかについて、学習プリントに記述させた。また、小集団交流において誰の考えの影響を受けたのかを記述させるとともに、小集団交流だけでは考えの広がりや深まりが得られにくいグループがあることを想定し、小集団交流での考えを出し合い学級全体で共有するようにした。

「決める」過程では、「つくる」「比べる」の過程を踏まえ、再度江戸幕府が 260 年以上続いた理由について最終的な自分の考えを記述させた。

③考察

最終的に主眼を達成できた生徒は 23 名であり（表 2）、授業の成果が見られた。

表 2 授業の主眼の達成状況（学習シートの分析結果 N=26）

評価基準	人数
A 小集団での交流を踏まえ、自己の考えを強めたり、修正したり、広げたりしながら、江戸幕府が 260 年以上続いた理由を考えることができている。	20 名
B 江戸幕府が 260 年以上続いた理由を、根拠にもとづいて考えることができている。	3 名
C 江戸幕府が 260 年以上続いた理由と、政治・経済・外交の政策が明確に結びついていない。	3 名

各過程における生徒の考えの変容の状況については、「つくる」過程では、18 名（69%）の生徒が、「江戸時代が 260 年以上続いたことに政治が大きく影響した」と記述していたが、「比べる」「決める」過程では、「江戸幕府が 260 年以上続くためには政治・経済・外交のすべての政策がないと成り立たない」と記述した生徒が 21 名（80%）にのぼるなど考えが大きく変容した状況がうかがわれた（表 3）。

表 3 各過程における生徒の考えの変容の状況（N=26）

	政治	経済	外交	政治と経済	政治と外交	経済と外交	どれも大切	無記入
「つくる」	18 名	1 名	4 名	1 名	0 名	1 名	0 名	1 名
「比べる」	14 名	0 名	8 名	0 名	0 名	0 名	0 名	4 名
「決める」	2 名	1 名	0 名	0 名	0 名	0 名	21 名	2 名

「比べる」過程において小集団交流をおこなったことで他者と自己の考えを比べ自己の考えを吟味することができたこと、また、小集団交流での考えを出し合うことにより学級全体で考えの変容を共有したことなどが効果的であったと考える。

これらの結果、「決める」過程において多くの生徒が自己の考えをさらに吟味することができた。

4 成果と課題

- ・「つくる・比べる・決める」の過程を取り入れた社会科指導に取り組んだことで、根拠にもとづいて考える生徒が見られた。
- ・各過程のあり方をさらに実践的に追究していく必要がある。

主な引用・参考文献

- 小栗英樹 2006 とともに学ぶよさを生かした中学校社会科学習指導の在り方—話し合い場面の充実をめざして— 宇都宮大附属中研究論集 55 10—19
- 横尾亮秀 2016 中学校社会科におけるツールミンモデルのデータを意識した—根拠を持った主張を行うための授業の考察—佐賀大教育実践研究 33 451—459